

54. コシコク・大震災の余波

昔の農村の生活で耳にとまった話題のいろいろ、代価を払って便宜をうけるコシコクの慣習、縄のびの実数値、震災時の村長の対応などを集めてみた。

コシコクイジ（越石井路）

A の鶴野は典型的な曲輪、B のように、西側に太中井路、東側にはオキノイジ（沖の井路？）があった。土地は北西が高く、太中井路からの水は C のように田面を段々に平流れに流れてオキノイジに出た。オキノイジは悪水路、排水路である。

B のように、耕地の中程を横切って 1 本だけ細いコシコクイジ（越石井路）があった。「越石」とは土地を借りて井路を掘らせてもらい、その代償に米を払うもので、その使用料をネング（年貢）と呼んでいた。その費用は利用者に割り当てた。

区画整理より前、鶴野では越石方式で細い畦道をリアカー道に広げた。

鶴野のダシビ（出し樋）

下流側も堤防で塞がれた鶴野曲輪は、ダシビ（出し樋）とよぶ暗渠を使って排水していた。まず曲輪の土手の下を 5～6 間（約 10m）くぐり、しばらく田の中を通ったあと、安威川・パンダ井路の下を 50～60 間（約 100m）くぐって鳥飼井路に放流した。鶴野は鳥飼井路を使っているのだが、天領だというので井路さらえの労役は免除されていたという。

縄のび、畝づまり

田畑をきちんと測量すれば、実測面積と公称の面積との間にはズレをあり、実測面積が大きい場合には「縄のび」、少なかった場合は「セツマリ（畝詰まり）」と呼ぶ。縄のびはいわば常識であるが、Y 氏によれば、千里丘東の小坪井の区画整理の場合、縄のびは平均 8 分、つまり 8 パーセントと出た。確かな実例なので載録しておく。

村の太鼓

D は、中内のもと庄屋、O 家の土間の天井の太鼓。5～6 代前の村のもので、大正時代に大阪葦原町の太鼓正で張り替えた。山田川の氾濫や火事を村中に知らせた。

関東大震災と村長

前項の O 氏（明治 42 年、1909）の父は村長、村で早く自転車に乗って回った人だった。大正 12 年（1923）の関東大震災の時、罹災した人達が東京から国鉄の線路を便りに西へ西へと着の身着のままで、ぞろぞろひっきりなしに通った。「ひと晩、泊めて下さい」。

親父は土間から奥の座敷まで開放し、母は 4 升鍋で 1 日中にぎり飯の炊きだしで目は真っ赤。親父はわしに「わらじを買ってこい」。翌朝帰る人に草鞋と小遣銭を渡していた。

